BOJ Watching

経済関連レポート

日銀副総裁人事

～次は雨宮氏か～

発表日：2018年2月16日（金）

第一生命経済研究所　経済調査部
担当　熊野英生（℡：03-5221-5223）

日銀人事の国会同意案が決まった。黒田総裁が続投で、雨宮理事が昇格。若田部昌澄氏が学会から登用という案である。この布陣は順当であり、次の総裁は雨宮氏だろうという見方を強める。イールドカーブ・コントロールを2018年中にどう使っていくかが見所だ。

順当な布陣

黒田総裁の再任がほぼ固まった。注目は副総裁人事である。すでに観測報道では、雨宮正佳理事が昇格し、学会から若田部昌澄氏の登用が流れていた。両名とも順当な布陣に思える。

雨宮氏は、すでに理事を２期勤めている。２期勤めたのは前任の中曽副総裁と同じである。これまで副総裁の片方は実務家の手堅い人物が就き、もう片方はシンボル的な存在だった。雨宮氏は、強力な実務家である。

従来と少し違っているのは、中曽・山口氏と続いた日銀プロパーの人々と違って、雨宮氏が次の総裁に強い意欲を持っている点だろう。続投する黒田総裁は、73～78歳の年齢で次の総裁職を担う。体力的に５年も続けられるかどうかはわからない。そうなると、いざというときに雨宮氏が総裁のバトンを継ぐこともあり得る。雨宮氏は、全身全霊で黒田総裁をサポートするだろう。成果を上げれば、次は雨宮氏が総裁という見方が強まるだろう。

政策面では、黒田総裁は導入したイールドカーブ・コントロールをもっと柔軟に使っていくだろうから、雨宮氏はその運用に万全を期する構えになろう。金利コントロールへのシフトは、雨宮氏らが推進してきた方針だから、出口戦略へも着実に布石を打っていくことになろう。

仮想の通貨論争の雄

５年前であれば、「副総裁に若田部氏」と聞くと仰天したことだろう。若田部氏はリフレ派人脈の中でも最左翼の人物だからだ。しかし、我々は岩田規久男副総裁の５年間を経て、リフレ慣れしてしまった。若田部氏は専門が経済学説史であり、金融実務に疎遠である。雨宮氏とは10歳も年齢が離れている。リフレ派はネット内の仮想空間の通貨論争には強いが、生身の世界では実務家を説得する力はない。

興味深いのは、反対票を投じている片岡剛士委員との距離感をどのように取るのかということ。副総裁は執行部であるから、常識的には反対票を入れにくい。出口政策を進めることには消極的であるから、いざという時に備えて反対票は温存しておくと考えるのが自然である。

新体制で何が変わるか

2018～2023年の期間も波乱含みである。米欧中銀は金利正常化に着実に歩みを進めている。日銀は、ゆっくりと出口を探して、金利コントロールの許容幅を広げていく戦略であろう。米国では、インフレ懸念が強まり、長期金利はさらに上昇していくと予想される。そうなると、長期金利ターゲットは０％に据え置いたまま、長期金利の上昇を0.20％～0.30％へと次第に許容していくだろう。2018年の中で多くの人が思っているよりも早く、そうした時期が訪れるとみる。

これまでの黒田体制は、サプライズ路線であった。緩和を演出するにはサプライズの効果はある。しかし、緩和を解除するときは、サプライズは厳禁だ。市場に日銀の意図をうまく織り込ませて、長期金利上昇をスムーズに導かなくてはいけない。この点は、雨宮氏の手腕の見せ所である。

若田部氏の役割はなかなか難しい。内部管理を担当するだろうから、日銀の風土を良い方向に変えて欲しい。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

黒田総裁再任となれば、イールドカーブ・コントロールに政権も同意したということになる。黒田総裁は、満を持して出口政策に５年かけて取り組むことができる。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。